

ミステリ読書案内

2023. 1. 15 発行元

第437号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

歴史・時代ミステリその9

第427号に続いて「歴史・時代ミステリ」の第9弾。もう種が尽きかけているので、同じ作家の再登場になってくる。歴史ミステリを得意とする作家は限られているので、取り上げられるテーマも似通ってくる。

歴史・時代小説のテーマ

私はミステリに関連したもののしか読まないのだが、図書館の歴史小説・時代小説の棚に行ってみると、大量の本が並んでいる。江戸時代の剣豪小説や捕物帳なども多い。歴史に登場する人物で言うと、織田信長や徳川家康関連は特に目立つ。

私の地元の話すれば、安倍一族と源頼義・義家の戦いである前九年の役、その後の清原氏の内紛から始まって奥州藤原氏の誕生に結びつく後三年の役が一番身近だ。奥州藤原氏滅亡後の鎌倉時代、室町時代の四百年間は葛西氏が治めた。ただ、

葛西氏の時代は曖昧な部分が多く、残っている史料も少なく、ましてや歴史小説の題材に取り上げられることも少ない。

秀吉の全国統一の流れの中で、小田原攻めの後、東北地方の豪族は最後まで抵抗を示したが、討ち取られてしまう。その後の江戸時代は伊達藩と南部藩になる。伊達騒動の後、田村藩という小藩ができた。それで明治へとになっていく。

今回は、平安末期の源平合戦に絡む源義経の本を二冊取り上げてみた。最初は平家の目を逃れ、後からは源頼朝の手から逃れて、流れ着いたのが平泉という場所…。

木谷恭介「邪馬台国の謎」殺人事件

1998年廣済堂ブルーブックス。「邪馬台国」と言うと作家の何人かは取り上げたいくなるようで、木谷恭介も『宮之原警部シリーズ』の一冊として本書を書いたようだ。本書の少し前に出版された『青の殺人事件』で宮之原警部を助けたエッセイストの結城泰代が再登場してくる。古代史を研究する若手学者の「トンボの会」の会合で、大学助教授の鬼室が行方不明になり、翌日水死体で発見された。鬼室はベストセラー本『古代日本成立の謎』の作者ではないかと議論の渦中にあった人物。そして、鬼室が秘蔵していた『百濟記』が盗まれた。宮之原は結城の依頼を受けて捜査に入る。その中で、『魏志倭人伝』の記述の検証から「邪馬台国の謎」にも挑戦していくことになる。

井沢元彦「義経幻殺録」

1986年講談社。「推理特別書下ろし」シリーズの第一弾として出版された本。主人公は芥川龍之介。歴史上の人物が歴史上の謎を探るといふ二重の歴史ミステリ。中国の清朝とロシアのロマノフ王朝絡みの展開。井沢元彦はこのような形を得意としている。

大正十年(1921年)芥川は大阪毎日新聞社の特派員として中国上海に渡った。中国情勢を新進作家として伝える役目である。しかし、芥川にはもうひとつの目的もあった。義経が平泉を脱出した後中国に渡り、清朝の祖になったという話に興味を持ち、その証明となる文献を求めての旅でもあった。「成吉思汗伝説」ともまたちょっと違った話。源氏が清和天皇から分かれたので、「清」王朝になったというのはあまりにもこじつけに近いような…。古文書を手に入れようとしたところ持ち主の老人が毒殺されたり、ロマノフ王朝の秘宝である巨大ダイヤモンドが消えてしまったり、明智小五郎が出てきたりとサービス精神たっぷりの展開。この時期は日本の大陸進出の時期であり、軍部の思惑絡みで動いているところが大きいので、裏に隠された不気味な意図が見え隠れして、歴史の重みを感じられる。本書の後に『義経はここにいる』という本も出している。

中津文彦「黄金流砂」

1982年講談社。江戸川乱歩賞受賞作品。この年の同時受賞は岡嶋二人の『焦茶色のパステル』。上記の井沢作品と同様に「義経」絡みのテーマのミステリ。私の住んでいるところも古生代の花崗岩地帯であり、平泉を支えた金の産地とされている場所である。話の中に出てくる細かな地名も、私にとっては馴染みのあるものばかりで、本書は正に地元の本ということになる。

東朝新聞盛岡支局に採用されたばかりの新人記者・法願総一郎が主人公。長野出身の法願は、赴任する列車の中でも偶然一緒になった乗客と平泉の話や義経伝説の話で盛り上がる。仕事を初めて一ヶ月くらいたった頃、盛岡市内のホテルで殺人事件が起きた。駆け付けてみると被害者は日本古代史の権威・高村教授であった。取材を続ける中で教授が残した「アヒル」というダイニングメッセージから、藤原忠衡の自筆古文書にたどり着いた。忠衡は、奥州藤原氏三代の秀衡が亡くなった後、頼朝からの追討がかかった時、源義経を守ろうとした人物で、兄の泰衡と対立した。歴史上、義経は泰衡に攻められ自害することになるのだが。本書では、忠衡文書の暗号解きとアリバイ崩しに話が進んでいく。義経北帰行伝説にどう結び付いていくのか…。